

文 化

カンボジアのごときもまたちにかかわって五年が過ぎた。国境キャンプからの帰還難民の救援活動を続けるうち、学校も教師も不足したカンボジアには、まず教育が必要と感じたからだ。その担い手は学生で、今では世界のどこへでも、教育を必要とするごときもたちの所へ出かけて行く。

「抱いちやぞ」と叫んで私は若ものを抱きしめた。ついでに音高く片方の類(ほほ)にキスもやっていた。予告された相手は身構えるヒマもない。だが「ハイ お次」と叫ばれた一番手はウハッと思ってたかも知れないけれど逃げなかった。

帰って来た学生に感動
「よく帰って来た、よく頑張ってきた。」私は出来るだけ元気に叫んだつもりだが、そばにいた事務局のMさんが泣き出ししている。昨年の一月末のことだった。

カンボジアの学校づくりから帰国して一週間も経ずにあの阪神大震災である。仲間の若ものはその当日から被災地に駆けつけ、この日帰って来た大学生は四日

ら被災地に駆けつけ、この日帰って来た大学生は四日

体と組んで旧ユーゴスラビアに学生を送った。JEBN(ジャパン・エマージェンシーNGO)としての活動だが、西側東側にとらわれず人道的立場からクロアチアにもセルビア側にも救援活動を展開したのだが、第三陣はセルビアを通してモン

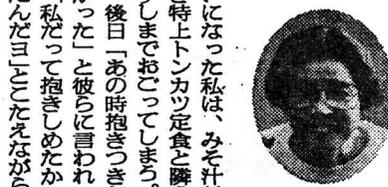
目の出発組だったが、卒業試験日ギリギリに戻ったのである。奮闘して来た彼らが愛(いと)しかった。思ったことは形にしたほうがよい。「抱いちやぞ」と照れをふきとほして、抱擁やキスが出来るのはボランティアの役得であらう。

テネグロまで行った。むろんJEBNの現地責任者が国連や国際赤十字と密接な連絡をとっているのは危険なことではない。

だがこの三陣は、当時セルビアが国連の制裁を受けていたので、ウインからルーマニアへ飛び、バスで国境を越えるという得難い体験をした。その中に海外旅行初めてという男女三人衆がいて、この三人だけが

お互いそんな遠慮があったら楽しい活動は出来ないぞと反省したのである。

8力所建設、2棟修理
大学生を活動の主力とする私たちがカンボジアのごとくに学校をつくる会は、海外ボランティアの三大条件といわれる「語学力、専門技術、長期滞在」のどれも満たしてはいない。けれど、カンボジアに三年掛かりで八カ所に新校舎を建設し、破損校舎二棟を修理している。



いになった私は、みそ汁付き特上トンカツ定食と隣のすしまで抱っこしてしまふ。後日「あの時抱きつきたかった」と彼らに言われ、「私だっ」と抱きしめたかったんだ」とこたえながら

こんな素敵なことを多くの人に知って頂くのが私の役割で、知人や母親団体や女性グループから学校建設費を預けていただけ者ようになった。我が会は、若ものが現地に掛け、顔が見えないといわれている日本人の顔を見てもいい、汗を流して現地の人と仲良くなり、実体験がなく勉強だけ

は、前回にいきも打てなかつた学生が、大汗をかきながらジェネレーターをまわす。モーターがらなりをあけると手をたたくて喜んだ女子学生が問う。「これで何をしますんですか?」。

「素しく学ぶ」モットー
熱しやすく冷めやすい日本人というけれど、先輩から後輩へ、そして口コミで大学の枠を超えて活動が続いているのは心強い限りである。

「素しく学ぶ」は決して何がボランティア? が合言葉だ。電気が来ていない所で

私は前回は、ぎも打てなかつた学生が、大汗をかきながらジェネレーターをまわす。モーターがらなりをあけると手をたたくて喜んだ女子学生が問う。「これで何をしますんですか?」。

私は前回は、ぎも打てなかつた学生が、大汗をかきながらジェネレーターをまわす。モーターがらなりをあけると手をたたくて喜んだ女子学生が問う。「これで何をしますんですか?」。

頑張る若者抱きしめたい

◇カンボジアのごとくに学校づくりの運動◇

小山内 美江子